

月例探鳥会の記録から、どんな成果が現れるか

日本野鳥の会東京・研究部長 川内 博

7月号の本欄に、山階鳥類研究所の平岡 考さんから「研究報告の雑誌を創刊しては？」というご提案をいただきました。

お隣、神奈川支部では、1994(平成6)年から『BINOS(バイノス)』という支部独自の研究年報を発行しています。最新号は2014年版で第21集となり、欠号なしで、毎年刊行されています。目次をみると論文1件、観察記録9件、調査記録1件、支部活動、雑録とあり、A4判・67ページとなっています。

日本野鳥の会本部が発行している研究誌『Strix(ストリクス)』は、1982(昭和57)年に創刊され、途中休刊がありますが、2014年版で第30巻となっています。こちらは原著論文7件、短報11件、その他で、B5判・178ページです。

平岡さんは、それらに倣い、当会でもというお勧めです。関係者の一人として、たいへん耳の痛い内容で、頭を低く下げるしかありません。

当会では、研究年報を発行していないということ以上に問題なのは、「東京都産鳥類目録」がないということです。同名の書籍がありますが、そこにはこんなサブタイトルがついています。「昭和49年度」。いまから40年以上も前の発行で、その利用価値は限定されています。新しい東京都産鳥類目録をつくらうという動きはあり、現在その土台はできていて、研究部ホームページ(※)で、だれでも見ることができるようになっています。しかし、未完成で、実用には耐えられません。また、本土版だけで、伊豆諸島・小笠原諸島などの島しょ版は作成されていません。一方、先の神奈川支部では、神奈川県鳥類目録『神奈川の鳥1977-86』が1986年に出され、5年ごとに改訂され、最新号は『神奈川の鳥 2006-10』で、6巻目となっています。

この違いは、第一義的には運営者の力量の差ということになり、当事者としては、前述のように平身低頭しかありません。ただ、いつまでもこん

な不甲斐ない状態が許されるはずもありません。

当会は、会計と編集以外は、その活動はボランティアによって成り立っています。幹事や探鳥会リーダーなどだけに頼らず、会員の方が自分の持っている力を、いろいろな面から発揮できる形を少しずつですが、提示しています。ひとつは「図書整理」という形でお願いしています。また、今月号にお願いの文書を同封しています「募金」もその一つと考えています。



さらにもっと直接的な形としては、自分の持っている「スキル」を提供する形です。本誌7月号の研究部レポートに、「月例探鳥会から読み取れること・・・探鳥会データの解析をはじめました」と発表しました。

これまでたくさんの月例探鳥会が実施されてきましたが、残念ながら現在のところその貴重なデータは眠っている状態なので、それを発掘し、分析・解析すれば、東京は元より、日本の自然の変化の一端を知る、重要な資料が得られる可能性が高いということで始めたものです。

この発掘作業のきっかけを作った人は、会員の中島徹也さんと、短時間で1995～2014年の20年間に行われた10か所の月例探鳥会のデータを、ボランティアで電子化していただきました。電子化されると、それを分析・解析できる人・お手伝いができる人たちが次々と手を挙げて、ワーキンググループ「日本野鳥の会東京・月例探鳥会記録解析グループ」(略称・TBG)ができ、すでに目標をもって活動を始めています。

「研究年報」「新・東京都産鳥類目録」の発行は、いまのところ見えていませんが、TBGが、日ごろの月例探鳥会の成果から、どのような宝を発掘するか、これからもご支援お願いいたします。

※ 日本野鳥の会東京・研究部HP：<http://homepage2.nifty.com/tokyo-birdstudy/>